公益社団法人国際演劇協会（ITI/ユネスコ）日本センターは、ユネスコ傘下の国際組織である国際演劇協会ITI（International Theatre Institute）加盟の公認団体です。ITIは世界平和と相互理解の促進を希求するユネスコ憲章の精神に基き、演劇による国際交流の増進を目的として1948年創設され、現在約85の国と地域が加盟しています。

公益社団法人 国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センター
Japanese Centre of International Theatre Institute / UNESCO

ITI

I.T.I.NEWS 2015.1.31. No.125

世界の中の日本センター

国際ネットワークにシンクロを

ITI 国際演劇協会
日本センター会長
永井　多恵子

皆様に新年のお慶びを申し上げます。

世界組織であるＩＴＩには、85の各国センターが加盟しています。昨年11月には、ＩＴＩの世界大会が２０１１年以来３年ぶりにアルメニアの首都エレバンで開催され、私もしばらくぶりに参加しました。アルメニアは、世界で最初にキリスト教を国教とした長い歴史を持つ国であり、世界遺産の古い教会がいくつも残っています。街の中心部の狭いエリアにたくさんの劇場が密集しており、ここが演劇の盛んな土地柄であることを示しています。

さて、今回の世界大会で行われたＩＴＩの理事国改選の選挙では、日本センターは残念な結果に終わりました。日本だけでなく、韓国、バングラデシュセンターも得票数が投票数の過半数に至らず、落選の憂き目を見ました。この両国センターはともに過去に優れた実績を残したＩＴＩ会長を送り出し（キム・ジョンオク氏とラメンデュ・マジュムダ氏）ＩＴＩに長く貢献して来た組織であり、日本もまた、財政の苦しい中、内村賞で貢献してきたのですから、関係者もショックを隠せませんでした。さらに、今回の大会の開催準備に奔走し、ホスト役を無事に務めたアルメニアセンターも選に漏れるなど、いくつも不思議な結果が重なりました。

曽田事務局長の報告にもある通り、今回大会での退任が決まっていたマジュムダ前会長は、閉会時の退任挨拶の中で、「驚くべき結果」という表現こそ用いたものの、同時に「私は民主主義を信じる（I believe in Democracy）」と毅然と述べて不信や不満を語らず、聴衆に感銘を与えました。

新会長には、フジャイラ（アラブ首長国連邦のひとつ）のモハメド・サイフ・アルアフカム氏が選出されました。

また、今回の大会で、パリのＩＴＩ本部事務局が中国・上海へ移転することが承認されました（今年4月より）。今後、中東や中国などが有力なスポンサーとなってＩＴＩの活動を支えていく構図はますます強くなっていくかも知れません。

今回大会で感じたことは、国内向けに事業を行うだけではなく、同時に、海外にデジタル発信していくなど、ＩＴＩの各国センターが形成している国際ネットワークの活動とシンクロするようにしていくことが大事だということです。活動の再構築をはかりたいと思います。今後とも、皆様方のご理解とご支援をお願い申し上げます。

ＩＴＩ第34回世界大会アルメニアで開催

ＩＴＩ本部事務局パリから上海へ

新会長にモハメド・サイフ・アルアフカム氏（フジャイラ（アラブ首長国連邦））

ＩＴＩの創設から67年目、本部事務局がパリのユネスコ本部を離れて上海へ移転することになりました。これを承認したＩＴＩの第34回世界大会は、２０１４年11月17日～11月22日の６日間、国と地域の48センター、約２４０名が集まってアルメニアの首都エレバンで、アニ・プラザホテルほかを会場に開催されました。日本からは永井多恵子会長、曽田修司常務理事・事務局長、小田切洋子理事、日本センター スタッフとして門田美和、中島香菜の５名が参加したほか、オブザーバーとして安宅りさ子理事（桐朋学園芸術短期大学）が出席しました。全体会議でＩＴＩ本部の上海移転が承認されたほか、新会長にアラブ首長国連邦のモハメド・サイフ・アルアフカム氏＝写真＝が選出され「これからＩＴＩの新しい歴史が刻まれる。先任者の労を多とし、新執行部をサポートしたい」と抱負を語りました。国際本部理事選挙では日本は当選を逸しました。（報告・曽田修司）

ITI 第 34 回世界大会で選出された新理事たち

全体会議での主な審議・議決事項は、次の通り。

▽ＩＴＩ本部事務局の上海への移転〈承認〉 これに伴うＩＴＩと上海市との合意書調印式は、10月にパリ本部で行われ、移転は今年４月の予定。

▽事務局の所在地変更と連絡事務所設置に係る規約改正〈承認〉

日本、国際本部理事当選ならず

▽国際理事（Executive Committee）選挙

投開票の結果、理事当選国（センター）は、ブラジル、キューバ、イタリア、ロシア、ベトナム（以上、第1ラウンド・新規）、ブルキナファソ、中国、キプロス、フジャイラ（ＵＡＥ）、ドイツ、フィリピン、スロベニア、スーダン、スウェーデン、スイス、ＵＳＡ（以上、第2ラウンド・継続）の16センター。

落選は、アルメニア、メキシコ、バングラデシュ、日本、韓国の５センター。

新会長には、フジャイラ（アラブ首長国連邦）のモハメッド・サイフ・アルアフカム氏が選出された。（副会長はこれまでの２人から４人に増員）

その他の提案（動議）による主な議決事項は次の通り。

▽国際貿易交渉における知的財産交易の自由化と舞台芸術への適用に反対する決議。
▽「芸術家の地位」に関するユネスコレポートに支持連帯を表明すること。
▽ＣＩＤＣ（文化アイデンティティと多様性に関する委員会）の中に３つのサブコミティーを作る。
① Theatre in Conflict Zones 紛争地域の演劇。
② Staging Cultural Identity 文化アイデンティティの舞台化。
③ Theatre for Social Change 社会変革のための演劇。
▽フィリピンセンターからの各種提案　ユネスコ設立70周年に開催される国際アート教育フェスティバル（今年５月）に、障害者、難民、被災者等が参加できるように支援することなど。
▽ＩＴＩの憲章を変更し、国別センターでなく、一国の中に複数のセンターを認めるようにすること。
この動議には議論百出で、今後可能性について検討することで合意。

宣言　アーティストの入国ビザの公正な発給について関係諸機関に要請する

オイルマネーからチャイナマネーへ

これまで、ＩＴＩ本部の財務状況については国際理事会（EC meeting）の討議・報告の際資料が配布されていましたが、国際理事以外の目にとまる機会は多くはありませんでした。

今回の世界大会で初めて配布された「ディレクターズレポート」というカラー冊子に掲載されていた財務報告によれば、近年のＩＴＩ本部の活動は、アラブ首長国連邦（ＵＡＥ）を構成する首長国のうちのシャールジャのスルタンからの寄附金（２０１１、12年度に約22万ユーロずつ、13年度に15・7万ユーロ）及びフジャイラのスルタンからの寄附金（13年度に約10万ユーロ）など、オイルマネーに大きく支えられてきたことが報告されています。今年以降は上海市が事務局経費の負担とスタッフの雇用増に同意しているということです。これまで国際理事（EC member）として活動して来たＵＡＥセンター（フジャイラ）のモハメド・サイフ・アルアフカム氏は、今回の理事改選の結果、ＩＴＩの次期会長に就任しました。

ＩＴＩ国際本部の財務状況

国際プロジェクトの提案は次の通り。
▽ＩＴＩの活動をラジオ（将来はテレビでも）で紹介するプロジェクト（イランセンター）
▽国際研究ワークショップ「現代文化における政治的演劇を再考する」（イスラエルセンター）
▽「パフォーミング・アース（地球）・フェスティバル」ワークショップによる共同制作を行うフェスティバル（同上）
▽エレン・ステュアート賞の創設（イタリアセンター）

国際本部事務局上海移転の経緯

ＩＴＩ本部の移転は、世界大会が間近に迫った11月４日、本部事務局から各国センターに送られたメールによって知らされました。

ＩＴＩ本部はこれまで長年にわたって運

営資金の確保に努めてきており、現在は、アラブ首長国連邦のシャールジャのスルタンとフジャイラの首長の援助によって財政が支えられています。いまの体制のままで資金援助を求めるやり方もあるが、他組織の例（OISTAT,ASSITEJ）を見ると、どこか（国、自治体など）が事務局を引き受けることで運営面での援助を得るやりかたもあると述べています。

上記の両方向で支援者を探していたところ、いくつかの国、地域から事務局誘致による支援の申し出があり、その中でもっとも熱心だったのが上海だったとのことです。上海市は、事務局経費の負担とともに、スタッフの雇用増に合意しています。上海市の予算の一部は、上海市、上海戯劇学院とＩＴＩのコラボレーション事業に使用されます。上海市当局の意向は、上海が常に舞台芸術と文化で世界に知られ、世界の芸術文化が上海に訪れるようになることであるとのことです。

移転は、９月にパリで行われたＥＣ（理事会）で決議され、ＩＴＩの憲章に従い、11月の世界大会で承認を得ました。移転後の事務所の所在地は、今年１月に決定される予定です。事務局の移転に伴い、ジェネラル・ディレクターのトビアス・ビアンコーネ氏は上海に移住。他のスタッフも移動を検討中です。

国際本部理事選挙の結果について

ＩＴＩ理事選挙のルール上、理事の最大数は２０名までと決められています。候補者は、得票の上位２０位までに入り、なおかつ、投票者数の過半数の支持を得なければなりません。今回の投票総数は、48であったので、上位20位までに入って25票を得ていれば当選となります。ところが、これまでの例に反して、今回は得票数が25票に達しなかった候補（センター）が５つあり、当選数は16にとどまりました。

当選最大数の枠まで余裕があるにも関わらず、16名しか当選しなかったことは、意外な結果と受け取られました。とりわけ、前期から継続する理事候補（センター）に投票する第２ラウンドで、バングラデシュ、日本、韓国のアジア勢がそろって落選したことは、当センターにとって大変残念な結果であったと言わざるを得ません。

今回は、事務局の上海移転というニュースが、特にヨーロッパ、アフリカ勢の投票に影響したのではないか（アジアの影響力が強まるのを嫌った）との観測もありますが、実際のところは不明です。一方で、日本、韓国両センターは、最近、理事会への出席や貢献度が少なかったのが影響したのではないかとの見方もあります。しかし、その考え方で行けば、バングラデシュセンターが落選したのはやはり不可解です。

この結果について、ラメンデュ・マジュムダ前ＩＴＩ会長（バングラデシュ）は、世界大会終幕の退任の挨拶の中で、「選挙の結果は、驚くべきもの（surprising）だったが、我々は民主主義を信じている」と述べて、結果を受け入れるとともに、今回の結果は最善の選択ではなかったというニュアンスを伺わせる発言をし、満場の拍手を受けました。

今後の対応について

本部理事選挙の結果を受け、日本センターは反省点を洗い出し、今後の対応策を練っているところです。

前回の第33回世界大会（アモイ）以降、ＩＴＩ本部あるいは各国センター、あるいはさまざまなプロジェクトがＩＴＩの枠組みの中で進行してきた中で、日本センターがどれだけ実質的な貢献をし、他のセン

ターからどのような評価を得て来たかという点を考えると、反省すべき点があったと思われます。

ビアンコーネ氏及び複数の新国際理事メンバーの人たちからは、ほぼ一様に「結果は残念だったが、次回の世界大会までに一緒に仕事をして（collaborate）、次は当選してほしい。日本はＩＴＩにとって大変大切な国なのだから」という趣旨の激励が数多く寄せられています。

今後、本部及び各国センター、各プロジェクトグループからの情報をもれなく受け取って機敏に対応すること、日本センターの行っている活動を対外的に知らしめていくこと、本部や各国センターなどと活動をシンクロさせていくことなど事務局機能の強化が求められます。そこで、当面、常勤ではなくても、対外的なコミュニケーション担当スタッフを任用するなどの対策を講じるとともに、中長期的な展望についても、理事会での議論や助言を得ながら、外部対応を強化していく必要を強く感じた次第です。今後の活動力アップに向けて、さらなるご指導、ご支援をお願い申し上げます。

ＩＴＩ・ユネスコ舞台芸術高等教育ネットワーク始動

ＩＴＩと演劇大学との提携

演劇舞踊に関する国際組織であるＩＴＩの事業運営は、本部事務局が事業を直接手がけている例外的なもの（World Theatre Day や International Dance Day など）がいくつかある中、基本的には、ＩＴＩに加盟している各国センターの理事たちが特定のテーマに関する委員会（Committee）を作り、委員会が主体となって事業が展開されています。その中で、演劇教育に関わる事業は、ＩＴＩの演劇教育に関する委員会（TECOM: Theatre Education and Training Committee）が担当しています。ＩＴＩの世界的な演劇教育ネットワークの動向について、近年大きな変化がありました。

大きな変化の一つは、ＩＴＩとユネスコチェアー（ユネスコの特定テーマに関する特別プロジェクトとして認定されたもの）の保持者であるブカレスト演劇映画大学のドミトリュー氏 Dr. Corneliu Dumitriu との間の契約を２０１２年末をもって終了したこと（ＩＴＩ第34回世界大会「事務局長レポート」ｐ112）。

今後は、ＩＴＩとユネスコの教育セクションの中の UNITWIN という大学教育組織との提携により新たなネットワーク化をはかることとなりました。ＩＴＩと UNITWIN/UNESCO との提携は、13年11月のユネスコ総会で了解され、14年４月に契約が締結されました。

新たなネットワークの名称は、ITI/UNESCO Network for Higher Education in the Performing Arts。ここでは仮に「ＩＴＩ・ユネスコ舞台芸術高等教育ネットワーク」という訳をあてておきます。このネットワークには上海戯劇学院（中国）とジョージタウン大学（アメリカ）が資金を提供し、13年４月末までに世界から21の教育機関が参加し、日本からは桐朋学園芸術短期大学が参加しています。

なお、昨14年11月の世界大会の際、アルメニアのエレバン映画・演劇大学が加入し、調印式が行われました。

第1回世界演劇教育大会と第3回アジア演劇大学演劇祭

北京の中央戯劇学院で

アジア演劇教育研究センター（ＡＴＥＣ＝徐翔理事長）は、「今日のアジアと21世紀の演劇教育」をテーマに、第1回世界演劇教育大会と第3回アジア演劇大学演劇祭を昨２０１４年5月18日から23日まで北京の中央戯劇学院で開催。アジア地区の演劇大学15校と20数カ国の国と地域から専門家、アーチストが参加しました。

開幕式は5月18日午後、中央戯劇学院（東城区）の実験劇場で行われ、私が司会を担当しました。

中国教育省体育衛生・芸術教育局の王登峰局長は21世紀の演劇教育の改革に大きな期待を寄せ、次のように語りました。

「演劇教育は、高等教育の中で欠くことのできない重要な役割を担っており、演劇教育の改革を促進し、実り豊かなものにすることは、教育部（教育省）と芸術教育委員会の重

報告・劉立濱

ＡＴＥＣ副理事長
中央戯劇学院院務委員会主任

訳・菱沼彬晃

日本にはない演劇総合大学
中国で世界大会

昨年５月、北京の中央戯劇学院で開かれたアジア演劇教育研究センター（ＡＴＥＣ）の世界大会

「今日のアジアと21世紀」テーマに

キイワードは「アジア」と「21世紀」――世界の国立演劇大学が創造の主体として連携に向かって進んでいます。ＩＴＩ（国際演劇協会）の国際活動の一環として、世界の演劇教育の中心となりつつあるのが中国の３大学――北京にある中央戯劇学院と中国戯曲学院（伝統演劇の専門校）、そして上海戯劇学院です。中央戯劇学院は世界演劇学校連盟（GATS = Global Alliance of Theatre School）とアジア演劇教育研究センター（ATEC = Asian Theatre Education Center ）、中国戯曲学院と上海戯劇学院はアジア太平洋ビュロー（APB = ITI Asia Pacific Bureau）をそれぞれ運営し、資金面でも主導的役割を果たしています。昨2014年、ＡＰＢのアジア大会が５月10日から17日まで上海戯劇学院と中国戯曲学院で開催され、続く18日から23日まで、ＡＴＥＣの世界大会が中央戯劇学院でそれぞれ開催されました。参加校の舞台公演やワークショップ、フォーラム・ディスカッションが実施され、ＩＴＩ本部からはトビアス・ビアンコーネ事務局長ら幹部が駆けつけました。日本に国立の演劇総合大学は残念ながらありませんが、日大芸術学部がＡＴＥＣに、桐朋学園芸術短期大学がＡＴＥＣとＡＰＢに参加しました。

大な責務です。第1回の世界演劇教育大会が有意義な討議と交流の場となり、21世紀演劇教育のカリキュラム研究と総合的な改革のために、建設的な見解を打ち出していただき、アジアと世界の高等演劇教育事業の繁栄と発展を推進していただけるものと確信しています。

どこが中心になるというのではなく

ＡＴＥＣ理事長
中央戯劇学院徐翔院長

ＡＴＥＣ理事長、中央戯劇学院の徐翔院長は次の挨拶を行いました。

「中央戯劇学院を代表して、今大会にご参加いただいたご来賓をはじめ各大学の皆さまを心から歓迎します。アジア演劇教育研究センターは9年の歩みを続けてきました。

アジアにおける演劇教育の発展と繁栄のため努力を惜しまず加盟校が心を一にして共同のプロジェクトを推進し、今、その成果を目の辺りにしているところです。この大会が、さらに広い視野と多角的な視点に立ち、さらに大きな包容力を持って世界演劇の現状と未来を分析し、アジアの演劇芸術に対する研究と討論を重ねる場となることを望みます。21世紀に生きる演劇人として、演劇の教育と実践に新しい内容と形式を盛り込むため、手を携えて探索と開拓の道を共に歩もうではありませんか。

誰が、あるいはどこが中心になるかというより大事なことは、いかにそれぞれの国と民族の文化がよき発展を遂げ、他に同化されることなく、また旧習を墨守することもなく、すぐれた演劇が新しい内実を生み出していくかということです。伝統的な演劇形式も世界の文化と相まみえることによって、新しい美的価値を自らに与えることになるでしょう。かくあってこそ、演劇が多くの人に喜ばれ、受け入れられる芸術形式になるものと信じております」。

まず演劇理論の研究と過去の検証を

国際演劇協会トビアス・ビアンコーネ事務局長

国際演劇協会トビアス・ビアンコーネ事務局長は、現在の演劇が緊急に必要としていることはまず理論研究と過去の検証であるとして、次のように語りました。

「現在の舞台芸術と演劇教育はいかにあるべきか、表現者の国際交流はいかにあるべきか、現在の演劇がさし迫って必要としていることは、演劇理論の研究、過去の検証と同時に現在の観客に対する関心、そして新しい方法の実験であります。

演劇に携わる者にとって必要なのは、現状を打破し、新しい試みを打ち出すことで

主　催　中国教育部（省）体育衛生局・芸術教育局
　　アジア演劇教育研究センター
　　（ATEC ＝ Asian Theatre Education Center ）
実　施　中央戯劇学院
後　援　国際演劇協会（ITI ＝ International Theatre Institute）
　　国際演劇研究会連合
　　(IFTR ＝ International Federation for Theatre Research)
　　国際演劇批評家協会
　　(IATC ＝ International Association of Theatre Critics)
参加校　中央戯劇学院、日本大学芸術学部、韓国・中央大学芸術学院、シンガポール・南洋芸術学院、中国戯曲学院、上海戯劇学院、香港演芸学院、ウズベキスタン国立芸術文化学院、韓国・青雲大学、ベトナム・ハノイ演劇映画大学、桐朋学園芸術短期大学、韓国・西京大学、コロンビア・バジェ大学、蒙古国立芸術文化大学、アメリカ・ニューメキシコ大学芸術学院

す。国際的な共同作業は新しい考え方と方法を指し示し、新しいページを開いてくれます。各大学が共同して演劇の高等教育のネットワークを立ち上げ、理論と実践を網羅するプラットフォームを構築することによって、不断の学習と交流の場がさらに活性化されることでしょう」。

自分の心を自由に表出させる訓練

国際演劇批評家協会主席
韓国芸術総合大学演劇学院
金潤澤教授

韓国芸術総合大学演劇学院教授で、国際演劇批評家協会（ＩＡＴＣ）主席の金潤澤氏は韓国で国立の演劇大学を創設したときの経過を振り返り、次のように語りました。

「演劇教育で最も大事なことは、身体動作や言語、その国固有の技法、様式を用いて、自分の心や情感を自由に表出させる訓練です。狭い専門技術の中に止まるのではなく、学科を横断し、総合し、そして協同して指導に当たるべきことを痛感させられました。その上で、新しい演劇教育の範例を作り出すことを私の提案としたい。学生の角度からカリキュラムを組み立て、一個人、一大学を越えて、アジアと世界の演劇教育の発展のために全力を尽くしたいと考えています」。

アジア演劇とグローバリズム

ドイツのミュンヘン大学演劇研究所の教授で、国際演劇研究会連合（ＩＦＴＲ）主席のクリストファー・バルム氏は「アジア演劇とグローバリズム」と題する基調報告を行い、次のように語りました。

「グローバリズムはさまざまな伝統文化の高度な融合をもたらして、異なった演劇式は精彩に富み、今日の演劇、特にアジア演劇は多様化することによって、標準化という成果を得ることができるでしょう。この受益者は疑いもなく演劇大学の教師と生徒なのです」。

国際演劇研究会連合主席
ミュンヘン大学演劇研究所
クリストファー・バルム教授

の間でも互いに相通ずるものを認めるきっかけとなります。この出会いによって演劇の形

ＡＴＥＣの沿革と加盟校

アジア演劇教育研究センター（Asian Theatre Education Center 略称ＡＴＥＣ）は２００５年10月に設立され、本部は北京の中央戯劇学院内に置かれ、同学院徐翔院長が理事長の任にある。

主な事業は世界演劇教育大会とアジア大学生演劇祭（ＡＰＢとは別）の開催、「アジア演劇教育研究」「アジア演劇教育交流年鑑」の発行。アジア各国の各地区で演劇教育を専門とする大学とその教師、学生のために交流のプラットフォームを提供し、アジアの演劇教育の国際化に資することを目的としている。現在16の加盟校と加盟希望の20校が活動に参加し、昨年５月、第１回世界演劇教育大会・第３回アジア大学生演劇祭が開かれた。加盟校は下記の通り。

中央戯劇学院、日本大学芸術学部、韓国・中央大学芸術学院公演映像創作学部、中国戯曲学院、上海戯劇学院、香港演芸学院、シンガポール・南洋芸術学院、インド国立演劇学院、オーストラリア国立演劇学院、ウズベキスタン国立芸術文化学院、韓国・青雲大学、ベトナム・ハノイ演劇映画大学、桐朋学園芸術短期大学、韓国・西京大学芸術学院、コロンビア・バジェ大学、蒙古国立芸術文化大学、アメリカ・ニューメキシコ大学芸術学院。

開幕式のイベントとして、中央戯劇学院の教師と学生たちは、各国からの来賓、参加者を前に、台詞と身体の基礎訓練、京劇、オペラ、ミュージカルをメドレーで演じ、客席からは惜しみない歓声と拍手が送られました。

スタニスラフスキー・システムに高い関心

今回の世界演劇教育大会は「今日のアジア――21世紀の演劇教育」のテーマをめぐり、「演劇教育の現状と課題」についての報告、パネル・ディスカッションが行われた後、「アジアの演劇教育の現状」、「欧米の演劇教育の現状」について2会場に分かれ、議論が交わされました。この期間、世界各国のアーチスト、専門家による講義やワークショップが行われ、観衆を引きなどつけると共に、次回の開催に大きな期待が寄せられました。

北京の中央戯劇学院で行われたアジア演劇教育研究センター（ＡＴＥＣ）の開幕式

「伝統劇の現代化」テーマにアジア演劇大学演劇祭

期間中、第3回「アジア演劇大学演劇祭」が「伝統劇の現代化」をテーマとして併催され、11作品が上演されました。

桐朋学園が『アンティゴネー』上演

中央戯劇学院『覇王別姫』、ベトナム・ハノイ演劇映画大学『娘モー嬢の弁護』、香港演劇学院『魚玄機のワイルド・パーティー』、韓国・中央大学『阿郎歌』、蒙古国立芸術文化大学『チュルク汗（かん）太后の夢』、桐朋学園芸術短期大学『アンティゴネー』、シンガポール・南洋大学『メタモルフォーゼ』、アメリカ・ニューメキシコ大学芸術学院『咫尺天涯（しせきてんがい）32's or AFAR』、韓国・西京大学『春が野山にやってくる』、中国戯曲学院『地球から』、韓国・青雲大学『シッシッ、昔々……』

いずれの舞台も独特の芸術的想像力、民族独自の劇的言語・文化性に満ち、「伝統演劇の現代化」というテーマをよく血肉化して、各校の教師と学生が演劇形式と演劇思想に対して行った積極的な探索を具体的に表現していた。

参会者がアジアと欧州双方の演劇教育の実際、双方の演劇の融合などについて論議を深める中、スタニスラフスキー・システムに高い関心が示されるなど、演劇を仲立ちにした文化交流は喜ぶべき成果を収めました。

江黒仁美さん、近藤陽子さん 桐朋学園2学生に優秀演技賞

5月14日、閉幕式が実験劇場で行われた。ＡＴＥＣ理事長・中央戯劇学院院長の徐翔氏らがすぐれた演目と演技者を表彰しました。受賞作は韓国・中央大学『阿郎歌』、中央戯劇学院の『覇王別姫』、中国戯曲学院『地球から』の3作品で、優秀演技賞は桐朋学園の江黒仁美さん（アンティゴネー役）と近藤陽子さん（イスメーネー役）を含む10人に与えられました。

この活動は中国国内の各メディアから注目され、大きく報道されました。

演劇大学のネットワーク拡充を

ＩＴＩ「アジア太平洋ビュロー」第７回大会

上海戯劇学院、中国戯曲学院拠点に演劇祭や国際フォーラム

ＩＴＩの国際活動の一環としてアジアの演劇総合大学が集うアジア太平洋ビュロー（ITI Asia Pacific Bureau 略称ＡＰＢ）の第7回大会が、上海戯劇学院と北京の中国戯曲学院（中国伝統劇の専門校）を拠点として昨年5月10日から17日まで開かれました。上海戯劇学院では加盟演劇大学の学長会議、演劇フェスティバルとワークショップが同時開催され、北京では加盟校や各国センターの演劇専門家が「伝統演劇の現代化と国際化」をテーマに国際フォーラムを行いました。ＩＴＩ国際本部のビアンコーネ事務局長も参加して、演劇大学ネットワークの拡充を訴えました。

世界の舞台で演劇の高等教育

上海戯劇学院副院長 宮宝栄

訳・菱沼彬晁

２０１４年5月10日から17日まで、上海戯劇学院と中国戯曲学院共催の「第7回アジア太平洋ビュロー」大会は、国内外20の演劇大学及び関係機関・団体が参加して行われました。今回の主な活動は、加盟大学の学長会議と演劇フェスティバルのほか、ワークショップ、フォーラム・シンポジウムが活気を加えました。

5月14日午前、上海戯劇学院の佛西楼（※注）にＩＴＩ本部のトビアス・ビアンコーネ事務局長を招いて、ＡＰＢ学長会議が開かれました（参加校・関係団体と上演演目は別掲＝次ページ）。上海戯劇学院からは韓生院長のほか、宮宝栄副院長、張雲蕾国際交流センター主任が参列しました。

会議は実務中心に行われ、次の2点が承認されました。一つはＡＰＢの加盟校が国際演劇協会・大学教育ネットワークに加入する件を優先事項として取り組み、組織をあげて未来への活動に向け、その第一歩を踏み出すことになりました。二つめはＡＰＢ新会員加盟の承認です。

ビアンコーネ事務局長はＩＴＩ大学教育ネットワークの紹介を行ってＡＰＢ加盟校の加入を求め、それぞれの学校が〝地球規模〟の活動を展開し、大学の演劇活動に新しい一章を開くことに期待を寄せました。

※佛西楼　上海戯劇学院は１９４５年に設立された上海市立実験戯劇学校、１９５２年に設立された中央戯劇学院華東分院などを前身として、１９５６年に現在の呼称となった。主な創設メンバーは熊佛西、顧仲彝、李健吾、呉仞之、欧陽予倩、陳白塵ほか。佛西楼は上海戯劇学院初代学長で、上海市立実験戯劇学校校長、上海戯劇専科学校校長、中央戯劇学院華東分院院長などを歴任した熊佛西を記念する大講堂。

また、加盟校が国際活動に参加し易くする方策を講じると同時に学校間の公平を期すため、今回の会議はＡＰＢ理事会の構成に調整を行いました。常設の職務以外に、輪番の理事長と輪番の委員の職務と職権を増やして、各校が組織内で主体性と積極性を発揮できるように計らいました。さらに２０１５年から17年までの３年計画を上程し、シンガポール・ラサール芸術学院、タイ・チュラロンコン大学芸術学院と台北芸術大学戯劇学院がＡＰＢ将来の活動に積極的な協力を申し出ました。

ＡＰＢ（アジア太平洋ビュロー）の演劇大学学長会議

オーストラリア校が新規加盟

最後にオーストラリア・ウロンゴン大学演劇学部がＡＰＢへの加盟申請を提出したのを受けて、ここ一年間の活動を検討の後、表決を行い、同校の加盟が認められました。また、西オーストラリア芸術大学とバングラデシュ・ダッカ大学がＡＰＢへの加盟を希望しましたが、保留となりました。

演劇フェスティバルに多くの学校が参加し、異なった演劇文化が上海戯劇学院のキャンパス内でぶつかり合い、また融合を深めました。参加校と上演演目は別表参照。このほか、中国、オーストラリア、タイ、日本、インドネシア各校の教授と学生がワークショップを行い、それぞれ異なった演劇表現と教授法で学生たちの国際感覚を養いました。その中で、桐朋学園芸術短期大学のペーター・ゲスナー氏が自ら演出した『アンティゴネー』の一場面について、ギリシャ悲劇の現代的解釈と身体表現の指

ＡＰＢ参加大学・関係機関上演演目

▷上海戯劇学院　『起死 Back to Life』
▷中国戯曲学院　『天顔』
▷香港演芸学院戯劇学院　『魚玄機のワイルド・パーティー』
▷台北芸術大学戯劇学院　『莱拉 Laila』
▷韓国総合芸術大学　『テレーズ・ラカン by Korea』
▷韓国湖西大学　『帰郷――我を忘るな』
▷インド国立演劇大学　『男兄弟 Madhyam Vyayog』
▷インドネシア国立ジャカルタ芸術学院　『カソンガン Kasongan の女』
▷イラン・テヘラン大学芸術学院　『トランジ Tranji 物語』
▷蒙古国立文化芸術学院　『母の魂』
▷桐朋学園芸術短期大学　『アンティゴネー』
▷マレーシア科技大学芸術学院　『他人の影 Reflection on an OTHER』
▷フィリピン・ミンダナオ国立大学イリガン理工学院　『分娩』
▷シンガポール・ラサール芸術学院　『セクハラに関するワークショップ劇場』
▷タイ・チュラロンコン大学芸術学院　『タイのシェイクスピア』
▷オーストラリア・ウロンゴン大学　『フェードル』（昨年加盟）
▷西オーストラリア芸術大学（加盟申請中）
▷バングラデシュ・ダッカ大学（加盟申請中）
▷ユネスコＩＴＩ国際演劇協会本部
▷ユネスコＩＴＩ国際演劇協会日本センター

導を行い、その前衛性で各校の注目を集めました。

緊張と多忙の会期中、上海戯劇学院は上海ランデブーメリーホテルで参加者の親睦と交流の一夕を設けました。各メンバーが肩の力を抜き、初対面の挨拶、自己紹介をすると、もう旧知の間柄、笑いが飛び交う中、所属校の情況、観劇の体験談など大いに盛り上がりました。使う言葉も英語や自国語、香港演芸学院戯劇学院から来た仲間は、英語、北京語、広東語、上海語を駆使して、今回の演劇フェスティバルの模様を語り、友好と相互理解を深めました。

桐朋学園芸術短期大学　『アンティゴネー』の舞台

5月16日には会場を北京の中国戯曲学院に移し、「伝統演劇の現代化と国際化」をテーマにフォーラム・ディスカッションを実施しました。中国戯曲学院の演技科主任・王紹軍教授と上海戯劇学院の孫恵柱教授が司会を分担し、十数名の専門家が独自の観点を語りました。日本からは国際演劇協会日本センターの菱沼彬晁理事が「ユネスコ精神と国際交流の目標」について話し、演劇の現代化とグローバリゼーションに潜む危険に触れました。

また、上海戯劇学院の韓生院長はＡＰＢの将来像について「演劇芸術の高等教育は、世界という舞台を得て広がり、大いなる活況を呈している。各校が交流の幅を広げるため上海戯劇学院はさらなる努力を惜しまない」と語りました。

異なった演劇大学受講の成果

トビアス・ビアンコーネＩＴＩ事務局長は、舞台芸術がさらにすぐれた成果を得るためには、異なった演劇大学の教育を受けることが必須であると強調し、その中からインスピレーションを汲み取ると同時に自分の学校に還元するという良性の循環を期待したいと語りました。

オーストラリア・ウロンゴン大学のジャニー・ハイエス教授は各国の演劇伝統と演劇文化の交流、さらに演劇の革新という新しい領域の研究を通してこそ、伝統的な演劇教育を改革する方法を探し当てることができ、演劇教育を革新する方式を押し広めることができると訴えました。

現在、ＡＰＢ各国における演劇教育の重要性は日増しに高まっています。演劇大学の実践活動は回を重ねる度に豊富なものとなり、学校間の交流もますます頻繁になり、親密度を加えています。上海戯劇学院はＡＰＢの活動を通じて加盟校に公演の機会とその体験を分かち合う広範なプラットフォームを提供しています。加盟校の教師と生徒が芸術的視野を広げるのに役立てるため、さまざまな芸術的実践と演劇教育の方法を試み、豊富な成果を上げています。ＡＰＢの拠点となる上海戯劇学院は、引き続きＡＰＢ加盟校の結びつきを強め、それぞれの国、地域の異なった文化の触れ合いと交流を促進していく決意です。

ＩＴＩ「アジア太平洋ビュロー」第７回大会報告②

中国戯曲学院でフォーラム・ディスカッション

アジア太平洋ビュロー（ITI Asia Pacific Bureau 略称ＡＰＢ）第７回大会は、昨年５月16日から北京の中国戯曲学院（中国古典劇・伝統劇の専門大学）に会場を移し、参加大学の学長と各国センターの演劇専門家が「伝統演劇の現代化と国際化」をテーマに共同討議を行いました。中国戯曲学院院長の巴図教授は民族文化の伝統こそ文化が安らぎ、その命を育む基盤であり、伝統文化の現代的発展を促すためには自分自身の変革がその基礎であるとして、民族的視点と国際的視野を兼ね備えた人材の育成を訴えました。また、同学院劇文学系主任の謝柏梁教授は、中国の伝統劇が時代のダイナミズムの中から地方劇の新しい劇種を生み続け、伝統劇の活性化と現代化を達成していることを解き明かしました。

自身の変革が発展の基礎
対外交流を上昇の道筋として

中国戯曲学院院長　巴図

訳・菱沼彬晁

２０１４年５月16日から17日まで「第７回ユネスコ国際演劇協会アジア太平洋ビュロー演劇大学学長会議・フォーラムディスカッション」が北京の当学院で開催されました。中国、日本、韓国、香港、台北など16カ国と地区の演劇大学の専門家が一堂に会し、「伝統演劇の現代化と国際化」をテーマに伝統の継承と革新、その発展について共同討議を行いました。

民族文化の伝統こそ、文化が安らぎ、その命を育む基盤だと私は考えています。また、互いの民族の伝統文化を尊重すると共に自国の民族文化の個性を保持し、伝統文化の現代的発展を促すためには、自分自身の変革がその基礎であり、対外交流を上昇に導く道筋だと考えています。

新時代の人材育成に演劇大学の責務

伝統演劇に現代的理念や時代意識を注入するためには、各国の演劇大学が重要な責務を負っています。特に重要なのは新世紀の演劇に必要な人材の育成です。「民族的視点」と「国際的視野」を兼ね備えていなければなりません。アジア・太平洋地区の演劇大学は「国際交流の架け橋となってアジア・太平洋文化の発展に資する」原則に立ち、演劇の領域において学術的交流と実践の共同事業に向かって、積極的な一歩を踏み出すことが求められています。

今回のフォーラムを通して、アジア・太平洋地区における演劇文化の発展のために新しい活力が注入されることを期待しています。各校の演劇教育や学術研究、その芸術的実践のためにもっと幅広いプラットフォームを構築し、各校の共同事業により多くの機会を提供できるよう願っております。

中国伝統劇の現代化と国際化

中国戯曲学院劇文学系主任
国際演劇協会批評部会中国分会副理事　謝柏梁

中国伝統劇の歴史をたどると、時代のダイナミズムの中で新しい地方劇が生まれてきたことが見てとれます。現代化と国際化は中国伝統劇の最も基本的な特質の一つなのです。

中国戯曲（訳注＝「戯曲」という言葉は日本語の意味とは違って、中国の古典や伝統芸能、地方劇などを総括する言葉。この誌面では便宜的に「伝統劇」と訳出）――中国伝統劇の長い生いたちの中で、現代化と国際化は最も基本的な、持って生まれた特質の一つであることが分かります。20世紀以来、中国伝統劇の現代化は次のいくつかの方面から観察されます。

俳優中心から演出家中心の上演に

（1）題材と内容の点から見ると、伝統劇とはいっても多数の現代劇、そして歴史劇とはいっても現代になぞらえた作品もまた多数あります。

（2）中国の伝統劇は、元はと言えば地方劇で、歴史的に絶えず新しい劇種を生み出しています。今や中国5大演劇と呼ばれ、全国的に流行している越劇※訳注参照、黄梅劇※、京劇※、評劇※、豫劇※よげきといえども、元雑劇や昆劇に比べると新参の劇種で、この中で越劇、黄梅劇は現代の劇種と言って差し支えありません。もっと新しい当代的なものでは1960年代に成立した龍江劇※、吉劇※などがあります。伝統劇の長い歴史をたどると、時代のダイナミズムが新しい劇種が生んだことがお分かりいただけるでしょう＝訳注参照。

（3）制作の主体から見ると、これまで俳優中心に行われていた演目の編成は、演出家中心に変わりつつあります。話劇や映画の演出家が伝統劇の舞台に猛然と参入し、舞台美術、照明、音響は片っ端から超高精度のデジタル化されています。「一

※訳注　中国伝統劇（地方劇）における新劇種の形成と発展を、その時代背景と地方性の関連で考えると、多くが歴史的事件、災害、革命、戦争、また、そのいくつかは抗日戦争の時期とも重なっていることに気づかされます＝訳者。

越劇　20世紀の初め、浙江省紹興地区の農村で生まれた比較的新しい地方劇。古代に越の国があったところから越劇の名がある。農閑期に6人の素人芸人が始めた劇団から始まって、上海、浙江省、江蘇省、福建省などを代表する劇種となった。1920年代に女性ばかりの劇団が相次いで生まれたが、日中戦争の戦火を逃れた女芸人たちが各地から上海に集まって大評判となり、さらにその数を増やした。近年は日本公演も行われ、〝中国の宝塚〟と呼ばれてファンを増やした。近年は男性の俳優を持つ越劇団も増えつつある。

黄梅劇　安徽省を中心とする地方劇。湖北、江西、福建、浙江、江蘇、台湾、香港などにも専門の劇団を持っている。

第1期は清朝の乾隆帝（在位1735～1795）末期から辛亥革命（1911）にかけて、寸劇的なものを脱して本格的な劇形式を整えようとする過渡期の段階。1786年、湖北省の東端で安徽省に隣接する黄梅県が長江の水害に遭ってから筋立てに内実的なものを取り入れ、役柄も道化、女形、二枚目役の枠を超えた。

第2期は辛亥革命から新中国成立の1949年。安黄梅劇の上演活動は次第に職業化され、清の康熙年から日中戦争にかけて安徽省の中心地だった安慶には数軒の専門劇場が建ち、京劇などの演目を受け入れて、演技や演奏形態、上演形式も豊富・多彩なものに変わった。

新中国成立後の第3期を迎えて黄梅劇は大発展を遂げ、1953年、安徽省黄梅劇団が成立した。

卓二椅」といわれたシンプルな舞台は、話劇や映画を見習って盛りだくさんの装置になっているのです。

4）音楽面から見ると、これまでの基調だった単声部・多旋律の構成が、主旋律・多声部に取って代わられつつあります。

（5）悲劇と呼ばれる作品は中国伝統劇の歴史に数多くありますが、その舞台にもギリシャ悲劇やシェイクスピア悲劇が大挙して乗りこんできています。また、欧米の古典を模倣した作品も少なくありません。

（6）伝統劇の現代化と国際化の過程で、新しい上演様式が生まれつつあります。これまでの歴史で見てきたように、時代のダイナミズムの中から新しい劇種が次々と生まれ、伝統劇の新しい国際スターも燦然と出現することでしょう。

中国伝統劇はどこへ向かうのでしょうか。バレエやミュージカルも一つの方向です。英語による上演もまたよし、外国演劇と中国の伝統劇を同じ舞台で上演し、相互に影響し合うこともあり得ます。そしてその試み、実例はすでに現れているのです。大事なことは中国伝統劇の文化と外国演劇が一つに溶け合うかどうかでしょう。今世紀に入って、国際演劇協会は中国演劇とのコラボレーションに熱を入れており、当学院（中国戯曲学院）のほか、中央戯劇学院や上海戯劇学院もそれぞれのやり方で異ジャンルのコラボを試みており、その成果は日ならずして現れることでしょう。

『ヘッダ・ガブレル』を越劇に翻案

中国伝統劇が欧米人の耳目に触れたのは18世紀にさかのぼり、中国伝統劇の国際化の方向を指し示します。

（Ⅰ）18世紀、広※東潮劇（福建省南部の潮州語による伝統劇）がアメリカ公演を行い、乾隆57年（1792年）、イギリスから派遣されたジョージ・マカートニー使節団は熱河離宮（避暑山荘）で乾隆帝に謁見を許されて観劇に同席したのに続いて、20世紀に入って中国伝統劇の外国公演は、やむことのない時代の風潮となりました。この一世紀、大編成の公演団が足跡を印した外国の数、反響の大きさは、もはや比較になりません。

その中で特筆すべきは、梅蘭芳の京劇アメリカ公演や韓世昌の昆劇日本公演のほか、忘れてならないのは梅蘭芳の薫陶を受けた程硯秋です。京劇の革新的創造を目指し、旧社会の下層で辛酸をなめる女性をテーマに多数の新作を書き下ろし、自ら演じた程硯秋は、1932年ヨーロッパに旅

黄梅劇成立以来の特色である歌と踊り、そして生活感あふれる舞台は映画化されたり、曹禺作で話劇の古典的名作とされる『雷雨』の、黄梅劇による上演も行われ、その日本公演で話題を呼んだ。

龍江劇／吉劇 東北地区で女形と道化役の二人が簡単な楽器を用いて語り、歌い、踊り、掛け合いを演じて大衆的な人気を博した芸能が1950年代に入って「二人転」と名づけられたが、実際には登場人物は二人に限らない。この進化形が黒竜江省では「龍江劇」と呼ばれ、これを演じる龍江実験劇院が1966年に設立された。吉林省では1961年に「吉劇」と命名された。いずれも周恩来総理が首唱した「地方劇の振興」に促され、〝一樹多枝〟の成果となった。

京劇 ご存じ「北京オペラ」。その血の中に各地、各時代の演劇の精華を受け継いでいる。その歴史は、母体となった安徽省の劇団が北京に入った年（清・乾隆55年＝1790年）から数えて2百余年で、4百余年の歴史を持つ日本の歌舞伎ほど古くはない。大衆の人気を博したその曲調に耳をすますと、時に勇壮で激昂の趣きがあるのは、陝西省で生まれた「西皮」の調べ。時に沈鬱で凄涼の気を秘めているのは安徽省で育まれた「二黄」の調べ。異なった情感を合わせ持つところから「黄皮」とも呼ばれた。一方、この時期に音楽性、文学性共に最高度の評価を受け、支配層や知識層から絶大な支持を寄せられて北京に君臨していた昆劇（明末起源の旧劇）は、その芸術性の高さ故に衰退が始まっていたが、京劇はその昆劇の長所をも吸収して舞台芸術としての形式を整えた。多くの名優を輩出して演目は1千3百を超え、「歌・しぐさ・台詞・立ち回り」を重視する上演スタイル、老若男女の役柄の精密な作り分け、衣装、隈取りに至るまで最高度の洗練が加えられている。

立ってフランス、ドイツ、スイス、イタリアなどで研鑽に励み、集めた台本は2千作を超え、写真や図版は5千点以上、書籍は7百冊以上、帰国後、中華戯曲専科学校を創設しました。

20世紀、粤劇（※えつげき）（広東劇）と豫劇が欧米の名作を海外で英語で上演し、口コミで多くのファンを獲得しました。また上海京劇院が中国語で『ハムレット』を、杭州越劇院がイプセンの『ヘッダ・ガブレル』を翻案した『心は天より高く』を上演し、中国伝統劇の理解を助け、より深く鑑賞できるレパートリーとなりました。

バロック・オペラを京劇で

（Ⅱ）外国人が制作の主体となるケースも出てきました。デンマークの童話作家・アンデルセンの童話を題材にした京劇『夜鶯（ナイチンゲール）』を創作したのは、当学院の留学生ゴールドマンです。当学院で初演の後、ドイツのブレーメンでも上演されました。

また、18世紀のドイツ人作曲家クリストフ・W・R・グルックが作曲したオペラ『中国の女』を改編し、京劇『界碑亭』の舞台に再生するいう試みが当学院で実現しました。悲壮美と劇的効果を過剰なまで追求するバロック・オペラの舞台と、京劇や昆劇の悲劇的要素は互いに引き合うものがありました。タイトルの『界碑亭』は国境の旅亭の意味。ここで偶然出会った2人の中国人と4人の欧州人の芸自慢が高じて、ついに芸比べを始めるという趣向です。「界碑（境界石）」は境界や街道の神・ヘルメスの象徴です。この神は旅人や芸人、詐欺師や泥棒の守護神で、国境だけでなく嘘と真の境、生死の境をも軽々と超える超能力を持ち、豊穣を司るファルス（男根）の神でもありますから、この一夜はまさにヘルメスかワルプルギスの祝祭で、バロック・オペラにふさわしい盛り上がりとなります。昆劇の『林冲夜奔』や京劇の『天女散花』の一場面も盛り込み、クライマックスは関羽に扮した主人公が「騎馬舞刀」の立ち回りを演じて、観客は大喜び。まさにヘルメスの導きで国境を越え、共同制作の新時代を開くものと言えるでしょう。

日本人・石山雄太の活躍

日本人の石山雄太の活躍も京劇史上空前の快挙です。当学院に留学し、中国人にとっては当たり前の中国語や京劇の表現世界の壁を一つ一つ乗り越えて、「武丑（立ち回りと道化）」という役柄をものにし、つい

評劇　1910年ごろ、河北省東北部の唐山で形成され、龍江劇や吉劇の元となった「二人転＝蹦蹦（ボンボン）」の影響を受けて、蹦蹦劇とも呼ばれた。中国有数の炭坑を持ち、中国の近代工業発祥の地でもある唐山の労働者たちの支持を得て、人気は東北一帯に広がり、1931年の満州事変（柳条湖事件）以後、芸人たちが大挙して北京、天津、上海、南京に流れ、全国に播種された。上海では、日本留学をした劇作家の田漢や欧陽予倩らの支持と援助を受け、特に欧陽は評劇のために『武松と潘金蓮』などの作品を書き下ろしている。1953年以降は欧陽が学長となった演劇大学の中央戯劇学院をはじめ、多くの劇作家、作曲家、演出家、舞台美術家らが評劇の作品づくりに参加している。

豫劇　古くは「河南梆子（バンズ）（拍子木を叩いて調子を高める劇種）」と呼ばれていたが、河南省の略称が「豫」であるところから、解放後「豫劇」と名づけられた。黄河の下流に位置する河南省は中州・中原と呼ばれた土地柄で、豫劇は甘粛、青海、チベット、新疆、安徽、江蘇に広がっている。その由来に定説はないが、明末に甘粛から入った梆子系の劇種が現地の民謡、俗曲などと結びついたものと考えられている。豫劇の特徴はまず歌詞が口語化されて分かり易く下情に通じていることで、豊かな地方色は生活感にあふれている。次に節回しが多彩で変化に富んでいること。七字句あるいは十字句の歌詞が整った音楽形式に乗って独特のリズムを奏でる。新作も数多く出され、気のきいた台詞や節回しが、全国で親しまれ、口ずさまれている。全国の曲芸団や歌舞団にも取り入れられ、喝采を博しているのも、こうした舞台にもよく適合するからであろう。豫劇が全国的な劇種として人気を高めている所以である。

に超難関の中国京劇院への入団を果たしました。歌舞伎の坂東玉三郎と蘇州昆劇院が共同して公演した『牡丹亭』も中国伝統劇の新しい一章を開くものです。日本の桜美林大学の京劇公演団が、中国伝統劇の最高学府である当学院を訪れて精進の成果を披露し、北京や天津の高校でも一幕ものを上演して中国人観客の目を輝かせました。

ユネスコ無形文化遺産に登録

（Ⅲ）昆劇、粤劇、チベット劇、京劇、影絵芝居などが相次いでユネスコの無形文化遺産に登録されました。中国伝統劇の保護と継承、国際的な波及は単に一国のできごとではなく、世界中の人々が手を携え文化遺産を保護し、その価値を高めようとする人類共通の喜びです。こうした文化財が世界各地にお目見えする機会が増えるにつれ、また、世界各国で次々と設立されている孔子学院や中国文化センターが活動を本格化させるにつれ、中国伝統劇のグローバル化は一層勢いを増すことでしょう。

中国伝統劇の現代化と国際化を推し進める中で、いろいろな課題や問題も明かになってきました。

海外公演についていえば、それは文化交流として公益に資するものなのか、それともコマーシャルベースで行われるべきものなのか？　公共の劇場で地道に上演されるべきなのか、それとも超一流の大劇場で賑々しく開催される国際フェスティバルなどに参加するのがふさわしいのか？　今あるいくつかの劇種と古典的演目は、世界の演劇大学の学生、特に伝統劇関係の教師や学生に必須のものとして、身につけられているのだろうか？

文化大国としての道のり

世界の人口大国、経済大国と呼ばれる中国が、世界からもっと尊重される国になるための決め手は、やはり文化的な牌（はい）を打つことでしょう。文化と芸術の結晶である伝統劇を世界の人に胸を張って見てもらいましょう。そのために、文化のよって来たるところを尋ね、民族が千数百年もの長きにわたって形成してきた舞台芸術の遺産を尊重しましょう。大国として屹立する国は、自ずと文化的成熟と品格を伴うものであり、これは歴史の流れが必然的に赴くところです。世界の人が文学を通して理解を深める国、劇場の観客として親しみを深める国、これが文化大国です。中国伝統劇の現代化と国際化は、わが国の有識者が深く考えなければならない大きな課題です。

潮劇（潮州劇） 広東省東部、福建省南部に起源する古い劇種。香港、マカオ、台湾、東南アジア一帯に広がった。明代の中期に歌唱法、上演形式が確立したとされ、その時代の歴史書には「禁淫戯」の文字も見える。各地の方言や俗語を多用して地方色に富み、世相や歴史的事件を反映した作品も作られて、清代末期には『林則徐』を上演している。

広東は〝海のシルクロード〟の拠点といわれていただけに、地方劇の中で最も早く海外に伝わり、イギリスの歴史家が記した「タイの中国人」によると、1686年にルイ14世の使節がタイで見たのがこの潮劇だと言う。しかし、実際には潮劇を取り入れたタイ固有の劇種であるとの研究がある。タイを基地にして、多くの潮劇公演団がマレーシア、シンガポール、カンボジア、ミャンマーなどに足を延ばしたという。1956年に広東潮劇団と潮劇演員訓練班が設立された。

粤劇（広東劇） 広東省に生まれ、台湾、マカオ、オーストラリア、アメリカ、カナダ、メキシコ、南米各国など、広東出身の華僑が住むところには必ず粤劇の公演団が追いかけている。粤劇の名は清・光緒年間（1875～1908年）に現れるが、その源は明代中期まで400年以上もさかのぼる。曲調は京劇でいう「黄皮」を主にして、南中国最大の劇種となっている。

辛亥革命前後、清国の日本留学生たちが帰国して結成した新劇（文明戯）結社「春柳社」の影響で粤劇の改良運動が始まり、実生活に題材を求めた演目、ニュースや時事問題を素材とした即興劇も生み出し、袁世凱の皇帝即位に反対する護法運動に加担する一方で、話劇や外国映画を模倣して商業化、通俗化の道も避けられなかった。解放後は舞台背景、衣装などに民族調を回復し、外国への商業公演も頻繁に行っている。

新法人移行後初のＩＴＩ日本センター平成26年度通常総会を開催

ＩＴＩ日本センターは、新法人移行後初めての通常総会を開催しました。旧法人の第24期と新法人第1期の決算を承認し、現在12名の顧問を名誉会員に推薦する提案も承認されました。

日時　平成26年6月22日（土）10時35分～12時35分
会場　松竹株式会社 大会議室（東劇ビル10階）
会員総数　２１０名
出席者　１２０名（委任状提出者94名）
出席会員　26名
安宅りさ子、安孫子正、壱岐照美、伊藤（舟本）巴子、伊藤洋、居上紗笈、大笹吉雄、大島信久、小川幹雄、小田切洋子、小林弘文、坂手洋二、真藤美一、斎明寺（関根）以玖子、曽田修司、高萩宏、高橋幸夫、永井多恵子、中山夏織、林英樹、菱沼彬晁、堀川登志子、松下芳江、松田和彦、吉岩正晴、和崎信哉

［第1号議案］（旧法人）平成25年4～6月期計算書類の承認
［第2号議案］（現法人）第一期貸借対照表、損益計算書及び財産目録承認の件
［第3号議案］顧問（12名）の名誉会員への推薦について
［報告事項］平成25年度事業報告について／平成26年度事業計画についてほか

まず議案書に基づき、平成25年度事業報告（平成26年5月25日開催の平成26年度第1回理事会で承認済み）を行ったのち、第1号、第2号議案の審議に入りました。平成25年度は、年度途中の7月1日に新法人に移行したことから、旧法人の第24期（平成25年4月1日～6月30日）の決算と新法人の第1期（平成25年7月1日～平成26年3月31日）の決算とを区分して併記する「分かち決算」を行っています。第1号議案は前者の、第2号議案は後者の決算に係る書類について審議し、討議の結果、全員一致で承認されました。

続いて平成26年度事業計画（平成26年3月16日開催の平成25年度第3回理事会で審議了承済み）が報告され、最後に第3号議案として12名の顧問を名誉会員に推薦する提案を行い、原案通り全員の賛成を得ました。

推薦された名誉会員は次の各氏。

大谷信義、片山幽雪、迫本淳一、田之倉稔、野村萬、波多野敬雄、福地茂雄、藤波隆之、堀威夫、松岡功、茂木七左衛門、山口昌紀

会員以外にも開かれたミーティングを

その後の意見交換では、入会者増加につながるような会員同士の、また会員以外にも開かれた懇談会（意見交換会）の開催が要望として提起されました。現状でも、さまざまな機会にオープン・ミーティングを開催していますが、今後、事業委員会や会員個別の活動と連携をはかりながら、理事会でも具体策を検討することになりました。

議案書、議事録をご要望の方は、事務局までお問い合わせ下さい（電話０３・３４７８・２１８９／mail@iti-j.org）。

ＩＴＩ日本センター 2014 年度事業報告

「世界の演劇教育を知る」が新スタート
ＩＴＩ・世田谷パブリックシアター レクチャーシリーズ

世田谷パブリックシアターと国際演劇協会日本センターがタッグを組む「ＳＰＴ×ＩＴＩレクチャーシリーズ」。２０１２年の第１期から好評をいただき、今年で第４弾を迎えました。今期はこれまでテーマとしてきた「演劇と社会」「世界の同時代演劇」に加えて、新たに「世界の演劇教育を知る」シリーズがスタートしました。

スタニスラフスキー・システムに高い関心

英国王立演劇学校（RADA）の校長を長く務めた演出家のニコラス・バーター氏は、イギリスでの系統だった俳優教育の在り方や、演劇学校を〝高等教育〟のレベルに押し上げることで生徒が奨学金を得ることが可能となり、教育を受けるチャンスを拡げたという教育機関の組織づくりについて話しました。

５月に世界演劇学校連盟（GATS）のフェスティバルに参加した桐朋学園短期大学の越光照文氏と、翻訳家で日中演劇交流話劇人社事務局長の菱沼彬晁氏からは、スタニスラフスキー・システムを吸収した中央戯劇学院の演劇教育や、意欲的な作品を発表し続ける劇作家について、中国現代演劇の今について聞くことができました。

スタニスラフスキーについては、従来人間の内面が重視されて来たその演技システムが身体面から見直されており、教育現場にも変化をもたらしていることを、シアター・コミュニケーション・ラボ大阪所長で大阪大学名誉教授の堀江新二氏に紹介していただきました。

さらに「演劇と社会」では、コミュニケーションワークショップの効用について演出家の西川信廣氏に、演劇とジャーナリズムについて朝日新聞論説委員の山口宏子氏にレクチャーしていただき、「世界の同時代演劇」では、チェコ蔵主宰ペトル・ホリー氏が20世紀アヴァンギャルド演劇にいたるチェコ演劇の流れを、上智大学教授の吉川恵美子氏には「人権」をキーワードにラテンアメリカ演劇を語っていただきました。

毎回、多様な切り口で世界の同時代演劇の現状をお伝えする当レクチャーシリーズ。今後の展開にご注目下さい。

「人権」をキーワードにラテンアメリカ演劇を語る上智大学教授の吉川恵美子氏

連続シンポジウム「劇場文化と観客創造」
経験とノウハウを共有

会場　東京芸術劇場

司会　高宮知数（立教大学社会デザイン研究所研究員）

現在、民間・国公立を問わず、どの劇場でも「観客創造」のためのさまざまな取り組みが行われていますが、その経験やノウハウは十分に共有されていないのが現状です。このシンポジウムでは、観客創造に取り組む現場の方々をスピーカーに迎え、

それぞれの劇場や劇団の現状と課題、今後の展望などについてディスカッションを行いました。

北海道から福岡まで、劇場や劇団、フリーの制作者、研究者など、延べ約100名が参加。議論は、「〝公共〟とはなにか」「観客を創造することは可能なのか」など、根本的なテーマにまでおよび、異なる立場・環境で活動する舞台関係者が課題を共有しながら、劇場や舞台芸術の意義を再考し、より豊かな劇場文化を生み出すためのネットワークづくりの場ともなりました。シンポジウムの内容はウェブサイトにアップ予定です

（助成　アーツカウンシル東京［公益財団法人東京都歴史文化財団］）。

次世代の観客を劇場に！ 高校生劇評グランプリ、参加圏を拡大

ITI日本センターでは、他の演劇関連団体との共同により、次代の観客育成のための取り組みとして、平成25年度に第一回「高校生劇評グランプリ」を開催しました。

最優秀賞は石本秀一さん（早稲田実業学校）

この催しは、高校生が劇場に親しみ、劇評を書くことを通して思考力、表現力を高めることを狙いとし、都内の高校演劇関係者や都内各劇場の多大なご協力により実現したものです。特別割引料金の「高校生応援チケット」を提供する制度も導入し、延べ351名の高校生がこの仕組みを利用して劇場での観劇の機会を持ちました。劇評の応募総数は77編。そのうち10編が優秀賞に、石本秀一さん（早稲田実業学校高等部一年）の書いたNODA・MAP『MIWA』の劇評「MIWA――愛の伝道師その人生とは」が最優秀賞に選ばれました。

平成26年3月に行われた表彰式で、選考委員長の扇田昭彦氏（演劇評論家）は、「筆者の分析力と批評性が感じられるいい劇評だった。公演を見ていない人にも舞台の様子が分かるように書かれていて、野田秀樹の演出と俳優たちの演技の魅力にもきちんと具体的に触れている。筆者自身の感動と若々しい知性が感じられる評だった」と講評を述べました。

テレビなど映像化された作品も対象に

平成26年度の第2回「高校生劇評グランプリ」は、2014年4月以降の公演を対象とし、関東圏以外にも参加対象地域を広げ、さらにテレビなど映像化された作品のレビュー部門を新設しました。また、新たに、プロの書き手による劇評の書き方のレクチャー、ワークショップを開催するなど、人材養成にいっそう力点を置いた内容になっています。感受性の豊かな若い世代が劇場・演劇と出会うための育成型プロジェクトに大きな期待が寄せられています。

「高校生劇評グランプリ」の表彰式に『MIWA』作・演出の野田秀樹氏、舞台美術の堀尾幸男氏も出席＝東京芸術劇場シンフォニースペースで

ＩＴＩ世界の演劇ワークショップ①

現代劇は古典劇に学べるか？

中央戯劇学院から陳剛教授を招いて

花柳千代氏と京劇・日本舞踊交流

桐朋学園芸術短期大学 三浦剛氏は現代演劇のための身体訓練

報告 伊藤巴子

現代演劇は古典劇に学べるか？――第１回「ＩＴＩ世界の演劇ワークショップ〈京劇・日本舞踊〉」が２０１４年８月19日から３日間、真夏の暑さの中で行われました。

中国北京の中央戯劇学院で演技、大学院で演出を学び、中国の伝統劇と欧米演劇の演技、演出双方の研鑽を積んだ陳剛教授をお呼びしました。中国の国立演劇大学には、すべての舞台芸術にかかわる学科があり、現代演劇と古典演劇が互いの糧となって、俳優にとっての新しい訓練方法が絶えず創り出されています。何と羨ましいことでしょう。

日本も能、狂言、歌舞伎と素晴らしい古典芸術を持っている国ですから、演劇を学ぶ学生や若い劇団員がその入口に立って伝統文化の豊かさを知り、現代の舞台芸術に生かす機会になればと願ってのワークショップでした。

参加者に京劇の指導をする陳剛教授（左）　右は花柳千代氏（写真提供＝東京新聞、撮影＝稲岡悟氏）

日本舞踊（歌舞伎舞踊）の手引きは、花柳千代先生がお引き受け下さいました。先生は新国立劇場オペラ研修所と演劇研修所、二期会オペラ研修所日本舞踊講師を勤めていらっしゃいます。「日本舞踊の基礎」中国語版の出版や中国への舞踊公演など、中国との文化交流で大きなお仕事をなさっていますから、陳剛教授が目白のお稽古場を訪ねたことをとてもお喜びになりました。

陳剛教授は中国伝統劇における基本動作のお話と実演、花柳千代先生は日本舞踊の歴史と現況、日本舞踊の動きの特徴をお話になってから、基礎の実技の発表として、箏曲「六段」、地唄「荒れ鼠」をお弟子さん方が踊って下さいました。

次の日は、仙川にある桐朋学園芸術短期大学のご協力によって大学内の小劇場で陳剛さんの中国伝統劇における基本動作、基本様式の組み合わせ訓練の講義とトレーニングを行い、最後は桐朋学園芸術短期大学の三浦剛講師による「現代演劇のための身体訓練」。アングラや暗黒舞踏などのさまざまなメソッドに通じる要素も感じられ、３人の先生方からたくさんの宿題が出されました。

舞台に美しく立つということの難しさ……千代先生はおっしゃいました。

「訓練、訓練、そして基本、規則をしっかり覚えてゆく。それが大切ね。あとは自由に踊る……モダンダンスは型を打ち破り、訓練された体で自由に踊ります」。

美しい黒地の着物姿でしゃきっと立っていらっしゃった九十一歳になられる千代先生でした。

（俳優・国際演劇協会日本センター監事・日中演劇交流話劇人社理事長）

ＩＴＩ日本センター 2014 年度事業報告

国際交流基金「ベトナム舞台芸術関係者中期招へい事業」112日間を受託

「ベトナム舞台芸術関係者中期招へい事業 VPAM(Vietnam Performing Arts Experts Mid-term Invitation Program)は、国際交流基金の ASEAN 諸国向け文化協力事業の中のプログラムの一つで、ハノイで活躍する舞台芸術関係者を対象とし、日本の舞台制作の現場に触れること、関係者との交流を促進することを目的とした事業でした。ＩＴＩ日本センターはＶＰＡＭ運営事務局として、３月23日の来日から７月13日の離日までの１１２日間の研修プログラム、通訳・アテンド、宿泊や移動のアレンジまでのコーディネイトを担いました。

来日したメンバーは総勢15名。俳優、舞踊家、舞台美術家、照明・音響の技術スタッフ、制作担当者……と、専門分野はさまざまでした。メンバーは、来日翌日から４週間にわたる座学や視察、観劇などにより、日本の劇場とそれを取り巻くさまざまな環境を知った上で、続く８週間は、専門別のグループに分かれ、制作の現場に入りました。

俳優、舞踊家、舞台美術家――ベトナムのハノイで活躍する舞台芸術家15名が国際交流基金の招きで来日、４カ月の全日程をＩＴＩがアテンドした通常の業務の中での海外からのゲストの受け入れは、受け入れ先機関にとっては大きな負担だったことと思いますが、どの現場でもメンバーの疑問や要望に応じた充実したプログラムが用意されていました。運営事務局として、受け入れ先の皆様への感謝の念は尽きません。

日本体験をテーマに『Love Story』を制作

その後、西日本の劇場を訪問したメンバーは、最後に、神戸の DANCE BOX でクリエイションに取り組み、わずか1週間の制作期間で、日本でのエピソードや新たに修得したテクニックを盛り込んだ、４カ月の日本滞在の集大成と呼ぶにふさわしい約40分の作品『Love Story』を創作しました。この作品は、帰国後、ハノイでも現地のマスコミを含む４００人の観客の前で上演し好評を博したそうです。

メンバー来日からの４カ月、事務局は彼らの前になったり後ろになったりしながら、ただひたすらに走り続けていたという感じですが、体験してもらいたかったこと、紹介したかったことはまだまだたくさんあります。「生涯二度とできない貴重な体験だった」「この経験を一生忘れない」という言葉を残して帰国したメンバーたちは、きっと舞台芸術を通した日越の交流を牽引してくれることでしょう。そしてこの感動的な４カ月を共有できたことは、ＩＴＩにとってもこの上ない幸福な経験だったことに間違いありません。（記・千徳美穂）

※ＩＴＩでは『ＶＰＡＭ報告書』（日越２カ国語、全１５０ページ＋フォトグラビア８ページ、発行＝国際交流基金）の編集も担当しました。ご購読ご希望の方は事務局までお問い合わせ下さい。

「プロフェショナルシリーズ」原サチ子ぶっちゃけドイツ演劇話②

7月21日に東京芸術劇場シンフォニースペースで開催の『海外で活躍する「プロフェショナルシリーズ」の第3弾は、『原サチコのぶっちゃけドイツ演劇話2』と題して、昨年に引続き原サチコさんにお話を伺いました。

今回は、原さんご自身でハンブルク・ドイツ劇場の方々にインタビューして作成した、まさに特典映像を見ながらのお話でした。レパートリー・システムの中で、日々舞台に立ち続ける原さん。演劇ジャーナリストの伊達なつめさんを聞き手に、実に分かりやすく、実感のこもったそのお話しっぷりは、まさにタイトルにある『ぶっちゃけ』にふさわしく、大変に興味深いお話ばかりでした。あっという間の充実の2時間でした。

ITI・日本演劇協会共催「演劇人祭 特別篇」歌舞伎座を満席に

ITIと公益社団法人日本演劇協会の共催による「演劇人祭特別篇」が10月26日、歌舞伎座で行われました。この演劇人祭は、公益社団法人日本演劇協会の主催により昭和29年（1954）以来5年おきに開催されてきた歴史のある催しです。

2014年は松竹株式会社が歌舞伎座での興行を始めて100年、宝塚歌劇団が宝塚少女歌劇として誕生し初公演から100年という、記念すべき年にあたります。そこで、今回は、歌舞伎と宝塚歌劇のこれまでの海外公演の歩みを振り返り、国際化が進む時代の中での日本演劇のこれからを考えるべく、当協会が主催に加わって、「演劇人祭 特別篇」として開催の運びとなりました。なお、この催しは、主催二団体を力強く支えていただいております松竹株式会社、東宝株式会社の協賛、宝塚歌劇団、歌舞伎座の協力によって実現に至りました。

総合司会に檀れいさんをお迎えし、中村梅玉さん、鳳蘭さんにお話をうかがう座談から始まり、坂東玉三郎さんと市川中車さんによる朗読劇『瞼の母』、柚希礼音さんをはじめとする宝塚歌劇団星組の皆さんによる『宝塚歌劇100・夢紡ぎ続けて』、梅若玄祥さんと藤間勘十郎さんの舞踊『花月』、最後は、坂東玉三郎さんの地唄舞『鉤簾の戸』など、当代一流の出演者による多彩な演目……満場のお客様をお迎えして、華やかなひと時となりました。

↑「演劇人祭 特別篇」で賑わう歌舞伎座入口
↓歌舞伎座の大舞台で座談会＝左からITI会長・永井多恵子、ITI副会長・安孫子正、中村梅玉、鳳蘭、日本演劇協会会長・植田紳爾の各氏

お詫び　平成二十六年十月二十六日に開催された「演劇人祭・特別篇」において、主催者側の不手際により総合司会檀れい様のお名前・写真を当日配付プログラムに掲載できませんでした。ここにお詫び申し上げます

私たちは戦争、暴力、支配を超えられるか？

1914 ― 2014　第一次世界大戦から 100 年

国際演劇協会はユネスコの「芸術と平和構築キャンペーンを受け、ＩＴＩ各国センターが「紛争地域の演劇」をテーマに活発な活動を行っている。日本センターもこれに呼応して２００９年に「紛争地域から生まれた演劇」企画を開始し、今年度で６回目を迎えた。この企画は、平成26年度文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」の支援により、日本センター発行の「国際演劇年鑑」の調査研究事業の一環として行われている。今回は「私たちは戦争、暴力、支配を超えられるか？　１９１４―２０１４　第一次世界大戦から１００年」をテーマに、リーディング公演、特別講座、トーク、シンポジウム、ラウンドテーブルを通して、ＵＫ／イスラエル、パキスタン、ナイジェリアの戯曲（日本初訳・初演）を紹介した。12月19日―23日、東京芸術劇場のアトリエウエストで行われ、毎回満席となって、このシリーズの定着を示した。

報　告
吉岩　正晴
演出家・ＩＴＩ日本センター副会長

燃えるスタアのバラッド
Ballad of the Burning Star（ＵＫ／イスラエル）

▽作＝ニル・パルディ (Nir Paldi) ▽訳＝角田美知代▽演出＝大谷賢治郎▽出演＝板津未来、尾川詩帆、小山萌子、佐原由美、土井真波、古舘一也　演奏＝鈴木正人

ロンドンを拠点とする多国籍劇団 Theatre Ad Infinitum によって製作され、一昨年のエディンバラ・フリンジ・フェスティバルで大賞を受賞、現在、英国ツアー中の作品だ。劇団はパリのジャック・ルコック国際演劇学校の卒業生たちによって結成されたフィジカルシアターを基本とする団体である。

作・演出・主演のニル・パルディはイスラエル出身で、パレスチナ問題を同時に「イスラエル問題」として捉え、紛争と占領がイスラエル人の心理にどのような影響と分裂を引き起こしているかを「キャバレースタイル」を使って描き出したという。

19日のリーディング公演終了後に、細田和江さん（イスラエル文学・文化、中央大学）と作者ニル・パルディさんのトークがあり、エルサレムに生まれ、３歳の時に入植地に引っ越したニルさんのバックグラウンドが話され、その体験がこの作品の原点になったという。差別され迫害された被害者としての歴史を持つユダヤ人が、今はパレスチナ人を差別し領土を奪い迫害する側にいるという現実とその皮肉さが興味深かった。

20日の公演終了後には、「１９１４―２０１４と演劇～ポストコロニアルの視点から～」と題してシンポジウムがあった。パネリストは、ニル・パルディさん、佐和田敬司さん（翻訳家、早稲田大学教授）、吉川恵美子さん（ラテンアメリカ演劇、上智大学教授）で、司会は七字英輔さん（演劇評論家）。

パルディさんによる、入植地に住むイスラエル人の状況、自分はイスラエル人なのかユダヤ人なのかというパルディさんの抱えるアイデンティティの話、イギリスでの観客の反応についてのコメントが興味深かった。また、パルディさんの話では、各シーンのほとんどを踊り続け、踊りでその場所（戦争のシーン、バスの中のシーン等々）を表現し、かつ語り歌うという創り方だったという。もともとフィジカル・シアターを基本とする作品だからリーディングでは無理があると言われていたが、音楽を上手く使った演出で面白く拝見できた。

佐和田敬司さんのオーストラリアにおける「アンザック神話」とアボリジニ人の話、吉川恵美子さんの「メキシコでは、演劇は武器。生きるために必要なものである」という話など、刺激的で興味深い指摘が多かったが、詳しく触れるには紙数がない。

平成26年度文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

ユネスコ「芸術と平和構築」キャンペーン

第６回「紛争地域から生まれた演劇」

【ITI特別講座】狂人と専門家 Madmen and Specialists（ナイジェリア）

▽作＝ウォレ・ショインカ（Wole Soyinka）▽訳＝粟飯原文子▽出演＝新井純

翻訳者の粟飯原文子さんからナイジェリア出身の作家ウォレ・ショインカと作品に関するレクチャーがあり、ナイジェリアの演劇を知る貴重な機会となった。１９８６年にアフリカ初となるノーベル文学賞を受賞したショインカは１９３４年生まれ。ナイジェリアとイギリスの大学で文学を学び、１９５０年代後半にはロンドンのロイヤル・コート劇場に勤務。この頃から次々と戯曲を発表していく。『狂人と専門家』は、ナイジェリア内戦（ビアフラ戦争、１９６７―７０年）の最中に投獄された経験をもとに書かれた作品で、「戦争を遠景に、権力欲にのまれ、悪に手を染めた医師を主人公に据え、人間性を奪う戦争の狂気を不条理劇の手法で描いた作品」だという。

レクチャーの後、新井純さんのリーディングにより作品の一部が紹介された。特別講座終了後、シンポジウム「戦争と演劇～ギリシャから２０世紀、現代～」が行われた。パネリストは鴻英良さん（演劇批評）、西堂行人さん（演劇評論家、近畿大学教授）、坂手洋二さん（劇作家・演出家、燐光群主宰）で、司会は七字英輔さん（演劇評論家）。古今東西の演劇作品で戦争がどのように描かれ、どのように受容されてきたのか、日本を含む世界のそこここで起こる紛争に対して芸術・演劇はどのようなスタンスを取れるのか、幅広い議論がなされた。西堂さんの（加害者と被害者という立場から考えると）「日本の戦争映画・演劇・小説では、被害者の立場からのものが非常に多い」という指摘は刺激的な新発見だった。

ブルカヴァガンザ Burqavaganza（パキスタン）

▽作＝シャーヒド・ナディーム▽訳＝村山和之▽演出＝西沢栄治▽出演＝明樹由佳、円城寺あや、加藤明美、小暮美幸、大美穂、村井雄

ブルカとは、パキスタンやアフガニスタンの女性が外出時に全身を隠すコートまたはヴェールのこと。パキスタンの近未来における「ブルカ強制時代」を設定、若いカップルを通じて社会風俗を滑稽かつシニカルに描いている。パキスタンを代表する劇団の一つアジョーカー劇場で２００７年３月に上演されたが、４月に上演禁止され、５月に再演が許されて現在まで上演が続いている。作者のナディームによると「ブルカは今や超保守的イデオロギーの象徴。西洋世界への抵抗、女性の人権の否定、退化した政治意識しかもたぬ過激主義者たちのもの」なのだと。パキスタンでの上演では、最後に登場人物全員がブルカをはね上げると、ブッシュやブレアらの顔が現れ、舞台上の大きなパネルに描かれたブルカの女性の絵がめくり上げられると素顔の美しい少女の顔が現れるという皮肉な終幕だった。

公演終了後、翻訳者の村山和之さん（南・西アジア文化研究、和光大学・中央大学）のトーク、23日の公演後には、翻訳者、演出家、出演者に加え、新野守広さん（立教大学教授）、宗重博之さん（劇団黒テント）をゲストに迎えてラウンドテーブルが行われた。この公演では出演者全員がブルカを被って演じたが、「ブルカを着けているとお客の顔をじろじろ見られたが、最後にブルカを取って挨拶した時、もの凄く恥ずかしかった」（円城寺あやさん）という話が、村山さんの「ブルカを着ると透明人間になれる」という話と重なって面白かった。

第20回内村直也賞

内村直也賞　国際演劇協会日本センターの第3代会長の故内村直也氏＝写真＝の遺志によって生まれたこの賞は、日本が外国の芸術家を対象に毎年出している数少ない賞の一つで、海外で日本の文化を学び、舞台芸術の創作にとり組んだ作り手たちをサポートし、奨励することを目的としています。国際的な演劇賞としての評価は高く、日本センターは創設以来この賞の管理運営の責任を担っています。

受賞作を大きく扱ったウェブ上の劇評 RUE DU THÉÂTRE（演劇街）

「ピカ　ドン（ヒロシマ）忘れられない記憶」に

Pika Don L'impossible oubli

第20回（2013年度）内村賞は、11年、12年に上演された作品が選考対象となり、ブリュッセル（ベルギー）のマルニ劇場で11年9～10月に上演された「ピカ　ドン（ヒロシマ）――忘れられない記憶」に対してに対して授与されることになりました（13年5月のITI本部理事会で決定）。14年3月27日のワールド・シアター・デイ当日、ITIベルギーセンターによって授賞セレモニーが行われ、同作品の作者アレックス・ロレッテ氏に賞が贈られました。

同作品は原爆がヒロシマの被曝者に与えた影響を現代の視点から叙情的かつ批評的にとらえ、この災禍を引き起こした人間の愚かしさを静かに、そして強く告発する舞台でした。

●会員通信――――2014年10月　秋のベルリンから　●庭山由佳

芸術の秋、食欲の秋、ストライキの秋。欧州では夏期休暇が終わり、と同時に交通機関のストライキが始まりましたが、ベルリンの各劇場は今シーズンにプレミアを迎える新作の稽古に余念がありません。私は文化庁新進芸術家海外研修制度にて2007年秋から09年秋まで研修したベルリンドイツ座ドラマトゥルク部にこの秋より復帰し、本日はイプセン『海の夫人』の稽古初日でした。

ベルリンの劇場には、私の留学中と比べるとさまざまな変化がありましたが、顕著なのは、芸術監督の交代したマキシムゴーリキー劇場でしょう。新監督はトルコ人街にある小劇場の芸術監督から一躍出世を遂げた女性で、座付の俳優作家演出家を「多文化共生」的な面々に入れ替え、就任初シーズンにして年間最優秀劇場賞を勝ち取ったばかり。中でも特筆すべき作品は、栄えあるネストロイ賞に輝いた『Common Ground』です。

ネストロイ賞

『Common Ground』

この作・演出家はイスラエル人女性ヤエル・ロネン氏、2012年に東京で上演された『第三世代』（ITI日本センター主催）の作家で、その折には来日して、アフタートークに登壇しました。『Common Ground』は、バルカン史を、その戦禍にいた市民の「声」を現地リサーチしてまとめ戯曲化した、生のそして同時代の政治的な作品で、演劇でしか体現できない手法で場面が次々展開してゆく、素晴らしいものでした。今後の活躍を大いに期待しています。

（舞台制作者・ベルリンドイツ座所属）

世界のＩＴＩセンター　イベントカレンダー（2015年３月～）

■観客変革会議　Audience (R)Evolution Convening　アメリカ合衆国（カンザスシティ）　2015年３月２５～２７日。アメリカの非営利地域劇場の全国組織であるTCG(Theatre Communication Group)が企画運営し、劇場における観客参加と地域連携の成功モデルを紹介する。

Information: http://www.tcg.org/events/ar/2015/info.cfm

Contact: audiencerev@tcg.org

■ASSITEJ Iceland　国際青少年パフォーミングアーツフェスティバル　アイスランド（レイキャビク）　2015年４月21～26日。

レイキャビク児童文化フェスティバルと同時開催。

Information: www.assitej-international.org/news/

Contact: assitej.iceland@gmail.com

■国際会議「舞台上の身体：テクノロジーに対する演技 Bodies On Stage: Acting Confronted By Technology (Take 2)”　フランス（パリ）　2015年６月15～17日。

Information:www.firt-iftr.org/item/348-call-for-papers-bodies-on-stage-acting-confronted-by-technology-take-2

■プラハ・カドリエンナーレ　チェコ（プラハ）　2015年６月18～28日。舞台美術の世界最大のイベント。ヨーロッパにある11の舞台美術団体との連携により、シンポジウム、会合、展示などを行う。2015年のメインテーマは「SharedSpace: Music Weather Politics 共有された空間：音楽気象政治学」。

Information: http://www.pq.cz/en/pq-2015.html

Contact: Eva Riebová, eva.riebova@pq.cz

■古代ギリシャ演劇国際フェスティバル／キプロス（ニコシア）　2015年７月。Paphos Ancient Odeon ほか古代の野外円形劇場で国際色に富んだ演劇作品が上演される。

Information: www.greekdramafest.com

Contact: Christos Georgiou, Executive Director, Cyprus Centre of ITI, ccoiti@cytanet.com.cy

■ANTI 現代アートフェスティバル／フィンランド（クオピオ）　2015年９月１～６日。フィンランド・クオピオ市の公共空間において、ライブ、音楽、視覚芸術、テキストなどさまざまなアート様式のサイトスペシフィックな作品を提供するフェスティバル。

Information: www.antifestival.com

Contact: info@antifestival.com

■Between the Seas Festival　アメリカ合衆国（ニューヨーク）　2015年９月７～１３日。地中海世界とそれ以外の地域のアーティストがコラボレーションを行う。

Information: www.betweentheseas.org

Contact: betweentheseasfestival@gmail.com

※上記イベントに興味のある方は、ITI日本センター事務局にお問い合わせ下さい。

会員消息（２０１４年１月～１２月）順不同・敬称略

入会

直江　早苗（舞踊）
吉村　桂充（上方舞）
個人会員から団体会員へ
オンパロス ダンス プロジェクト（居上貞之）
日本舞踊尾上流事務所（尾上墨雪）
山の手事情社（福富はつみ）

退会

安部　陽子
北村　充史
酒井　誠

ご逝去

高橋昌也（１月）
朝倉　攝（３月）
金春惣右衛門（３月）
藤波隆之（８月）
大山勝美（10月）

・顧問で名誉会員の片山幽雪さんが２０１５年１月13日にご逝去されました。

受賞・叙勲

▽第21回読売演劇大賞　芸術栄誉賞　朝倉攝
▽第64回芸術選奨文部科学大臣賞　大笹吉雄
▽第39回菊田一夫演劇賞　特別賞　草笛光子
▽２０１３年度　朝日賞　仲代達矢
▽紫綬褒章　坂東玉三郎

ＩＴＩ日本センターは個人、団体会員を募集中

ＩＴＩ国際演劇協会日本センターでは、舞台芸術・放送芸術を通した国際交流に関心をお持ちの個人・団体の会員を随時募集しています。会員には『国際演劇年鑑』などセンター発行の出版物が無料で配布され、センター主催・共催のワークショップやシンポジウムなどに割引料金で参加できます。

海外公演の現地連絡サポート

海外の演劇祭への参加や海外公演などをお考えの方には、現地とのコンタクトを当センターがサポートします。

詳細・お申し込みは、ウェブサイトにアクセスいただくか、事務局までお問い合わせください。皆さまのご入会をお待ちしております。

▽個人会員　入会金６、０００円　年会費１２、０００円
▽団体会員　入会金６、０００円　年会費１８、０００円
▽賛助会員　入会金なし　年会費１８、０００円～１００、０００円（一口）

編集後記

世界大会に初めて参加しました。何が話されているか、言葉としては理解できても、文脈がわからない、というもどかしさをしばしば感じました。逆に言えば、それさえわかっていれば、ＩＴＩのネットワークを活用できる可能性は格段に広がるという実感を得ることができました。今回の経験を今後に生かしていきたいと思います。（曽田）▲やっぱりヨーロッパは黄昏れていた。日本も日暮れてるし――ＩＴＩ本部がオイルマネーを食べ、今度はチャイナマネーを食べに上海へ移転――目で見る世界の歴史だ。一方、ＩＴＩ日本センター主催の「紛争地域から生まれた演劇」が年々、観客動員数を増やしている。中近東、アジア、アフリカ、中南米などの「夜明けの前が一番暗い」国々の作品が重い衝撃となって伝わってくる。（菱沼）

（© 国際演劇協会日本センター 2015）

I.T.I.　第125号
2015年1月31日発行
発　行　公益社団法人国際演劇協会日本センター
発行人　永井多恵子
編集人　曽田修司　菱沼彬晁
住　所　〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1 国立能楽堂内
Tel03-3478-2189　Fax03-3478-7218
Email:mail@iti-j.org
URL http://iti-japan.or.jp

松竹創業120周年
製作 松竹
二月大歌舞伎
2月2日(月)→26日(木)
〈昼の部〉午前11時開演
一、吉例寿曽我（鶴ヶ岡石段の場 大磯曲輪外の場）
二、彦山権現誓助剱（毛谷村）
三、積恋雪関扉
〈夜の部〉午後4時30分開演
一、一谷嫩軍記（陣門組打）
二、神田祭
三、水天宮利生深川（河竹黙阿弥作 筆屋幸兵衛 隅田川辺の芽柳）
中村吉右衛門
松本幸四郎
尾上菊五郎
新橋演舞場
東京都中央区銀座四－十二－十五 地下鉄「東銀座駅」直結
電話〇三（三五四五）六八〇〇（代）